

最高学部

2024年度

自由学園最高学部4年課程卒業研究・2年課程卒業勉強について

奈良忠寿

2024年度最高学部4年課程卒業研究は12人が12のテーマに取り組んだ。2年課程卒業勉強は2人がひとつのテーマに取り組んだ。成果はそれぞれ論文にまとめられ、2025年2月22日(土)に自由学園創立60周年記念講堂で開催された報告会で発表された。

I. 最高学部の卒業研究と卒業勉強とは

自由学園最高学部生は4年課程(四年制)・2年課程(二年制)とも、自由学園での学びの“まとめ”として、最終学年の1年間を通して研究活動を行う。研究成果は、論文として纏められるだけでなく、卒業直前に開催する報告会で口頭発表され、論文は自由学園図書館で保管されている。

4年課程の卒業研究は、3年次から2年間所属する「領域横断研究」「経営実践研究」のゼミナールで進められる。領域横断研究は、最高学部で展開するリベラルアーツを土台とする研究である。学生の問題意識や興味・関心に端を発することが多く、設定した研究課題の解決のために必要な専門分野を修得し、特定の専門の枠を超えた研究活動を行うことで創造的に探究する力を養う。

経営実践研究は「マネジメント」ゼミナールから成る。自由学園の教育理念に呼応する経営者像を掲げ、人を大事にし、社会への新たな構想を持ちつつ、事業革新に挑戦する次世代経営者、起業家あるいは社会貢献団体経営者たる資質を養う。マネジメントに所属する学生は3年次に学外研修(おもに企業インターンシップ)を行うことが義務付けられている。

2年課程では卒業勉強のゼミは設置されないが、1年次の終わりからテーマを話し合い、アドバイザーのもとで2年次から毎週定期的に時間をとり、勉強を進めている。

II. 2024年度の研究内容

2024年度の4年課程卒業研究と2年課程卒業勉強はどのようなものであったか。報告会の予稿集(最高学部2025)をもとに研究タイトル一覧と一部の研究の概要を紹介する。

フィールドサイエンス

1本の論文が執筆された。この研究のフィールドは著者が男子部のときに育林活動を行った場所である。その点で筆者の男子部・最高学部7年分の体験が研究の背後にある。水源地域である名栗植林地の調査に基づくよりよい森づくりへの提言と、近年の名栗植林地の教育活動での利用が低調なことから、在校生が名栗植林地を知るきっかけとなる教材の検討と実践を行った。筆者が行った調査は地質地形、水質、気象、野生動物と多岐にわたり、文献調査と現地調査を組みあわせている。最高学部1・2年生を対象に行った実践で、その有効性を確認した。

ヒューマンサイエンス

3本の論文が執筆された。論文2は筆者が留学先で感じた疑問を端緒とする。調査結果から政治関心が高いにもかかわらず、政治行動は忌避するというギャップをよみとり、忌避に至った要因として社会運動に対するネガティブイメージの形成と戦後の革新政党の衰退という2点をあげ考察を行っている。市民参加型社会を築いていくために示唆に富む論文と言える。

論文3は、筆者が絵画制作をし、その絵画を最高学部で飾ることで自由学園の芸術教育に関する筆者の考察の裏付けを試みている。この絵画は年報原稿執筆時には飾り続けられており、筆者は卒業したが長期的な検証が試みられている。

論文4は自由学園資料室に保管されている一次資料を丹念に読み込み、自由学園で実践されていた教育活動と、その結果残された生活表ならびに生活帳の評価を行っ

た労作だが、その関心の発端は、最高学部 1 年次の生活経営研究実習の活動にある。なお、この論文は、生活大学研究に投稿され掲載された(竹島 2025)。

データサイエンス

3 本の論文が執筆された。論文 5 は衣服廃棄問題を解決するための消費者の意識改革に関する研究である。意識をもち活動を持続するために必要な「場」のデザインを検討するために複数回のワークショップを展開し、意識変化を分析した。ゼミとして「表象としては見えにくい場のデザイン」という新たな研究分野への展開をもたらす研究となった。

論文 6 は、2022 年度卒業研究「二次燃焼構造による最適な焚き火台の燃焼の探求」の研究を引き継いだ。2022 年度の研究では焚き火台の高さを変えて燃焼効果を観察したが、本論文では外筒の幅を変え、吸入される空気量の変化を観察した。二次燃焼構造を採用した焚き火台に関する新たな知見を得ることができた。

論文 7 は、コロナ期における対面でのコミュニケーション制限への反省から、注目されるボードゲームの効果に着目した。仮説に基づく実験と検証を行い、ボードゲームはデジタルゲームに比べ、言語理解力、比較力、関係構築力の点でよい結果となり、コミュニケーションスキル向上やアイスブレイク、質問しやすい雰囲気づくりに効果があるとした。

ライフスタイル

2 本の論文が執筆された。2 本とも研究に自己が投影されており、自身にとつてのより良いライフスタイルの研究から、類似する趣味をもつ他者の豊かな生活へと射程を伸ばしたという共通点がある。特に論文 9 は現在、社会的にも注目される現象を扱い、「時間」「お金」「人との関係」でバランスのとれた状態で「推し活」をすることで、行動面・心理面でプラスの効果が表れているという分析

が興味深い。

マネジメント

3 本の論文が執筆された。いずれも 3 年次に学外研修を行った成果に基づいた研究であり、仮説の構築とアンケート調査による検証を研究の手法とする。論文 10 の筆者はお笑い芸人として活動しており、研究成果が自身の活動に反映されていくことだろう。

2 年課程

二人により 1 本の論文が執筆された。筆者はともに生活経営研究実習で農芸グループに所属しており、自身の活動のなかで気が付いたことを研究の発端とした。自分たちも作成した栽培計画書や栽培記録など、農芸教室に保管されている記録を、今後の活用が容易になるような整理とデータベース登録を行い、利活用を試みている。そして、自由学園で展開してきた「農に関する学び」は農業技術の習得を第一目的とせず、植物の栽培を通した人間教育が行われてきたと考察した。

III. 2024 年度の報告会

2024 年度は、学校暦の関係上、創立 60 周年記念講堂

II-1 2024 年度論文題目一覧

領域横断研究：フィールドサイエンス	
1	名栗植林地の今後を見据えた現地調査と活動の検討
領域横断研究：ヒューマンサイエンス	
2	現代日本において受け入れられる社会運動の在り方とは？
3	自由学園明日館 壁画の成立と修復－壁画を通して見る自由学園の美術作品の意義－
4	自由学園創立当初から戦中にかけての「生活表」及び「生活帳」についての考察
領域横断研究：データサイエンス	
5	衣服に愛着を持って着続けるために ～共に繕う場をつくる～
6	焚き火台における二次燃焼効果と吸気速度の変化に関する考察
7	ボードゲームのもたらす教育効果の一考察
領域横断研究：ライフスタイル	
8	日本と欧米のホラー映画に見る恐怖の表現の違い
9	「推し」のいる生活 ―「推し」がもたらす心理的效果に関する研究―
経営実践研究：マネジメント	
10	多様化するお笑い芸人に関する研究
11	航空会社のブランド・イメージに関する研究 ―ANA と JAL の比較から―
12	Z 世代のファッション意識に関する研究
2 年課程卒業勉強	
13	自由学園の農の学びに関する一考察 ―農芸教室資料利活用の試み―

の利用が午前中に制限された。一人当たりの発表時間を最大限確保すること、発表者と参加者の交流の時間を確保するために、質疑応答を交流会で個別に行ない、なおかつ交流会の会場を最高学部食堂に移した。

報告会の形式は、会場での口頭発表を基本にしつつ、遠隔地からの参加者の利便性のため Zoom を用いたオンライン発表を併用した。先に述べた理由から、口頭発表と交流会の間に会場の移動があり、準備と当日の行動があらわたしくなったが、交流会にも多くの方が参加し、研究に関わる資料や論文を前に活発な意見交換が行われていた。交流会は設備の関係からオンラインでは参加できない。このため、オンライン参加者には発表会場での質疑応答が望ましいが、発表者と参加者の意見交換は交流会の方が活発である印象をうけた。

10 巻 1 号』

おわりに

2024 年度の卒業研究・卒業論文を概観してきた。近年の卒業年次生は、自由学園在籍中に自由学園創立 100 周年を迎え、男子部・女子部の共学化も目にしたことからか、自由学園の教育活動が残した史資料を扱うものが目につく。最高学部の卒業研究・卒業勉強は、身近な経験に基づく視点から、社会的課題に切り込む論考が多く認められることが特徴であるが、論文執筆が自分の自由学園での学びの集大成、アイデンティティー確立と結びついている点もまた特徴である。人間形成を目的とする自由学園の教育が結実しているといえ、先に述べた自由学園の史資料に関する研究も、自身のアイデンティティーの再確認となっているのだろう。今回の研究成果は、自由学園教育史をひも解くあらたな資料として活用されるだろう。

謝辞

学生の研究指導にお力添え下さったすべての皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。あわせて、報告会にご来場のすべての皆さまにあらためて感謝申し上げます。

参考文献

自由学園最高学部(2025),「2024 年度 自由学園最高学部 卒業研究・勉強報告会 予稿集」,
竹島 響(2025)「自由学園創立当初から戦中にかけての「生活表」及び「生活帳」についての考察」『生活大学研究

